

人格の偉大性に関する心理学的研究

— (その6) 特に、「やさしい男性」の類型化と性差について —

藤 田 主 一

I. 研究の背景と目的

人の個性 (individuality) に関係する心理学的な概念は多様に存在する。その中でも人の性質に関係する概念に、気質 (temperament)、性格 (character)、人格 (personality) などがあり、それぞれ独自の基準と領域が存在し研究も進んでいる。気質は個人に生まれつき備わっている生理的基盤に基づいた特徴であり、個人の行動特徴のうちで情動 (emotion) 的な反応と深く関係している。性格は個人の行動の仕方を特徴づけ、静態的で固定的な個人差を問題にする。人はその時々状況に応じて種々の行動をとるが、その行動は比較的一貫した様式を持つものである。人格とはそのような個人の背後にある一貫した行動様式を総合的に示したもので、人が日常生活の中で他者の個性を認知し、また他者との人間関係を円滑に遂行していく上で欠かすことのできない概念である。Allport, G.W. は「人格とは、個人の特徴的な行動や思考を決定づける個人内のダイナミックな精神身体的なシステムである」と定義している。ここでいう「ダイナミック」とは「力動的」ということであり、また「精神身体的システム」とは個人に内在しているさまざまな組織や体制のことで、それらは相互にかかわり合いをもち、決して切り離すことができない体系である。Allport の定義では、人格とは、①精神と身体両方の機能が統合されたシステムであり、②システムは環境との相互作用のなかで力動的に変動し、③個人に特徴的な行動や思考を生み出すベースになっていると考えられる。人が日常生活の中で他者の個性を認知し、また他者との人間関係をスムーズに遂行していく上で欠かせないものは、個人が持っている人格 (個人の全体像であり、特定の性格のように価値基準のみで形成されている狭義の概念とは異なる) を的確に把握することであろう。

本研究の目標は、人格研究の中でも特に人格の『偉大性 (greatness)』を構成している要素や背景を明らかにすることである。『偉大性』という概念は、通常「偉い人」「立派な人」などといわれる個人を構成する要因を総括するものであるが、必ずしも明確な定義が存在するわけではない。ところで、『偉大性』の心理学的な構造がどのような要因の枠組みとしてとらえられるかについて、今日まで主として欧米の研究者たちが独創的な研究を進めてきた。それは「偉人」とし

て取り上げられた人を、いくつかの観点から精査分類する試みである。たとえば、素質的な高い能力から稀にみる業績を成し遂げる（知性や業績の傑出）、人間的に素晴らしい特性から人びとに尊敬される（性格や活動の高揚）、非常に立派で世のためになるような仕事を残す（社会的名声や貢献の拡大）などの事実に基づいて、「偉大」な個人を生み出す背景を明らかにしようとしてきた。そこでは、傑出した人＝偉大な人＝偉大性という学問的確証は得られていないが、彼らが何らかの偉大な人格を保有していた可能性は否定できない。ここで問題になるのは、私たちが特定の個人を「偉大な人」または「立派な人」と評価する基準をどこに置いているのかを追究すること、「偉大人格」が形成される発達のメカニズムを追究することである。歴史的な偉人や天才の研究も同様に考えていかなければならない。

筆者は『偉大性』を評価する40項目（表-1）を作成し、この質問票を用いて種々の検討を重ねてきた。項目の選定は大学生を対象とした予備調査の結果に基づいている。自由記述により「偉大な人」または「偉い人」を指し示す表現を収集し、得られた記述を類似性の高いカテゴリーでまとめ、仮説的ではあるが『偉大性』の5因子（BASIC）構造を想定した（表-2）。この5因子は安定していることが確認されている。

表-1 『偉大性』に関する40項目の質問票（藤田）

1. 一生懸命に努力する人	21. ルールや決まりをきちんと守る人
2. 発明や発見をした人	22. 立派な成績や記録を残した人
3. 家族のために行動する人	23. 社会に役立つことをしている人
4. 頭のよい人	24. 賢い人
5. 心が広い人	25. よく気がつく人
6. 自分の考えをきちんと言える人	26. 何事にもくじけない人
7. 社会で大きな仕事をした人	27. ノーベル賞をもらった人
8. 自分を犠牲にできる人	28. 電車でお年寄りに席をゆずる人
9. 豊かな知識がある人	29. すばらしい才能を持っている人
10. 性格がやさしい人	30. がまん強い人
11. 何でも最後までやりとおす人	31. 何にでもチャレンジする人
12. 大統領や総理大臣になった人	32. 歴史の教科書にのっている人
13. 社会のためにつくしている人	33. ボランティア活動をしている人
14. 判断力や決断力のすぐれている人	34. 頭の回転が早い人
15. 真面目な性格の人	35. 誰からも好かれる人
16. 自分の夢を実現しようと頑張る人	36. 物事に真剣に取り組んでいる人
17. 世界的に有名な人	37. 著書をたくさん出版した人
18. 困っている人を進んで助ける人	38. 世界平和のために貢献している人
19. 社会の出来事をよく知っている人	39. すぐれた技術を持っている人
20. 責任感の強い人	40. 思いやりのある人

表-2 『偉大性』の5因子構造仮説（藤田）

(1) 行動の基準と努力	-----『達成行動の強さ』因子	----- B ehavior
(2) 仕事や業績	-----『知名度と高業績』因子	----- A chievement
(3) 社会や家族への貢献	-----『社会活動の貢献』因子	----- S ocial contribution
(4) 知的能力の高さ	-----『知的能力の高さ』因子	----- I ntelligence
(5) 性格や人柄	-----『性格や良い人柄』因子	----- C haracter

このような経緯を踏まえ、本研究では『偉大性』因子に含まれる「性格や人柄」を特定する項目の1つである人格の『やさしさ』に焦点を当てる。今日、『やさしさ』という概念はいろいろな分野で使用され「性格」に限らないようである。たとえば、「地球にやさしい」「環境にやさしい」「胃にやさしい」「人にやさしい」などである。このような表現は、言葉のもつイメージの多様性を示すものであるが、本来の『やさしい』という語の意味内容を辞書から蒐集すると、以下のようなカテゴリーに分類することができる。

- | |
|---|
| <p>(1) 親切で、情け深く、思いやりがある。
 (例) 親思いのやさしい子。老人にやさしい。</p> <p>(2) 上品で優美である。
 (例) この仏像の顔はたいそうやさしい。やさしい物腰。</p> <p>(3) 性質が素直で、おとなしく、穏やかである。
 (例) 気立てがやさしい。やさしい声で話しかける。</p> |
|---|

辞書的な解釈は3因子で説明が可能であり、それは「思いやり」「優美」「おだやか」がキーワードである。現代の若者は『やさしい』という言葉に魅力を持つ。「だってやさしい人」「ちっともやさしくない」などの言い方をする。すでに、詫摩武俊は「……やさしい人といわれる人が備えている特徴の第一は、思いやりがあるということである。相手の立場に立って考え、相手の気持ちに敏感に受け止め、特に傷ついた心をよく理解できる人である。また物ごとによく気がつき、行きとどいた心配りをするが、しかしそれを決して誇張したりせず、さりげなくやる人である。……やさしい人の第二の特徴としては、親切で思いやりがあるということである。これは相手の心にいま、何が生じているかを的確に汲みとる能力であるといってよい。……やさしい人の第三は、温厚で寛容であるという特徴である。めったなことでは怒ったり大声でどなったりしない人、心が広くおだやかで安定感のある人……」と述べている。さらに、やさしい人の全体的なイメージは「常に笑顔をやささないで、ゆったりとした態度や行動をする人」が連想される。伊藤忠弘は大学生を対象にした研究において、『やさしさ』を「思いやり」「誠実さ」の2因子で説明して

いる。

一方、精神科医の大平健は著書『やさしさの精神病理』の中で、ある女子高校生が「この間、学校へ行く時、ふだんなら坐れないのに、突然、前の席が空いて坐れちゃったのね。そしたら次の次（の駅）ぐらいの時、オジイさんが私の前に立ってエ、私、立ったげようかなって思ったけど、最近の年寄りって元気な人、多いじゃないですか。ウチのおばあちゃんなんか私たち孫以外の人がオバアさんなんて言ったら、もうブンブンだからア、このオジイさんも年寄り扱いたら気を悪くするかなあ、なんて考えてたらア、立つのやめた方がいいか、なんて考えてエ、寝たふりしちゃったの」と主張する例を紹介している。彼女によれば、老人に席を譲らないのも「やさしさ」ということになる。大平は同じような臨床例（上司の前で黙り込んで返事をしないやさしさ、親から小遣いをもらってあげるやさしさ、親をがっかりさせないやさしさ、やさしく叱るやさしさ、など）を数多く紹介し、精神科医から見た『やさしさ』の意味を問うている。したがって、親に心配をかけることも『やさしさ』となる。さらに、旧来の『やさしさ』とは、相手の気持ちを察し共感することで互いの関係を滑らかなものにするのであったが、現代の『やさしさ』では相手の気持ちに立ち入ることはタブーで、相手の気持ちを詮索しないことが滑らかな関係を保つのに欠かせないというのである。

このように、『やさしさ』の意味や使い方に変化が見られているが、若者の人間関係の中で捉えられている本質はどのようなものであろうか。そこで、本研究では『偉大性』(BASIC)の「C」因子に含まれる『やさしさ』項目を取り上げ、その意味するところを明らかにしたいと考える。たとえば「やさしい男性／女性が好き」という場合、実際にどのような人物像を描いているのかは曖昧である。やさしさの概念を分類し、類型化・構造化への探索研究としたい。

II. 研究の方法

1. 調査対象者

本研究に参加した対象者は、東京都内および埼玉県内の大学に通う男子大学生200名（平均年齢20.9歳）、女子大学生180名（平均年齢20.4歳）の合計380名であった。

2. 調査材料

調査材料は、男子および女子大学生から見た『やさしい男性』『やさしい女性』『やさしくない男性』『やさしくない女性』の実像を把握するために、自由記述による方法を採用した。調査対象者の属性（年齢、所属など）を求めたフェイスシート（匿名）に続き、『やさしい人』について自由に記述できる空欄を設けたB4判横組み用紙を準備した。空欄はTST（Twenty Statement Test）方式に準じて6記述できるものであり、『やさしい男性／女性』『やさしくない男性

／女性』の4カテゴリーの組み合わせで、4種類×6記述の計24個である。

3. 手続き

- (1) 自由記述の回答方法に対して、「あなたは『やさしい男性／女性』とは、どういう人を言うのだと思いますか？ 男性／女性の『やさしさ』（性格、行動、考え方など）を具体的に書いてください」「あなたは『やさしくない男性／女性』とは、どういう人を言うのだと思いますか？ 『やさしくない男性／女性』（性格、行動、考え方など）を具体的に書いてください」という教示を与えた。
- (2) 自由記述できる空欄はそれぞれ6個ずつあるが、記述量および記述個数は自由である。
- (3) 記述後、「今書いた文章の中で、あなたが一番に主張したい『やさしい男性／女性、やさしくない男性／女性』を1つ選んで○印をつけてください」という教示を続けた。記述数の多い人はその中から選択させ、記述数が少ない人（例：1個）はそれを選択するように指示した。
- (4) 調査は、それぞれの担当者が教室で集団実施した。

III. 結果と考察

1. 記述内容の検討

調査対象の男子大学生から得られた記述総数は1,324個であり、これは記述予定数（200名×24個）の27.6%であった。その内、『やさしい男性』については406個（平均2.0）、『やさしい女性』については307個（平均1.5）、『やさしくない男性』については337個（平均1.7）、『やさしくない女性』については274個（平均1.4）であった。

一方、女子大学生から得られた記述総数は2,288個であり、これは記述予定数（180名×24個）の53.0%であった。その内、『やさしい男性』については687個（平均3.8）、『やさしい女性』については531個（平均3.0）、『やさしくない男性』については587個（平均3.3）、『やさしくない女性』については483個（平均2.7）であった。全体に、女子大学生の記述個数が男子大学生の記述個数に比較して多いのは、調査に取り組む姿勢の高さかもしれない。ただ、記述個数が少ないからといってその内容に質的な差異があるとは限らない。また異性に対する記述個数に差が見られるが、これは女子大学生の方に男性への関心の高さとイメージのしやすさが強いいためかもしれない。

記述内容をまとめるに当たり、類似の回答を1分類としてカテゴリーを設定した。今回のデータ分析はいくぶん仮説的であるため類似性については確定したものではないが、男子および女子大学生から見た場合の『やさしい男性／女性』と『やさしくない男性／女性』とも、同様のカテ

ゴリーに分かれる可能性が示唆される。以下はそれをまとめたものである。

『やさしい男性／女性』（10種類のカテゴリー）

- ①気づかう人, ②エスコートする人, ③思いやりのある人, ④相談にのる人,
- ⑤理解する人, ⑥道徳的な人, ⑦気配りする人, ⑧穏やかな人, ⑨援助する人,
- ⑩その他

『やさしくない男性／女性』（9種類のカテゴリー）

- ①自己中心的な人, ②攻撃的な人, ③自分勝手な人, ④気づかない人,
- ⑤自己主張する人, ⑥冷たい人, ⑦態度が変わる人, ⑧交流しない人, ⑨その他

さて、本研究では特に男子および女子大学生が捉えた『やさしい男性』『やさしくない男性』の記述内容に注目することにした。また、記述量全体の内容分析ではなく、男子および女子大学生が○印をつけた1記述に着目することにした。すなわち、1名につき1記述の内容を類似のカテゴリーで分析するものである。

2. 大学生が捉えた『やさしい男性』の分析

男子および女子大学生が捉えた『やさしい男性』について、その記述内容を精査し類似性の高い10種類のカテゴリーによる分類を試みた。表-3は、その結果をまとめたものである。表からも理解できるように、男子大学生から見た『やさしい男性』と女子大学生から見た『やさしい男性』との間の出現順位（出現頻度）に差異が認められる。

表-3 大学生が捉えた『やさしい男性』の分類（頻度，%）

カテゴリー	男子	女子	全体	性差
気づかう人	27 (13.5)	44 (24.5)	71 (18.7)	**
エスコートする人	19 (9.5)	45 (25.0)	64 (16.8)	**
思いやりのある人	31 (15.5)	17 (9.4)	48 (12.6)	
援助する人	31 (15.5)	10 (5.6)	41 (10.8)	**
道徳的な人	28 (14.0)	11 (6.1)	39 (10.3)	*
理解する人	21 (10.5)	13 (7.2)	34 (9.0)	
相談にのる人	8 (4.0)	20 (11.1)	28 (7.4)	**
穏やかな人	15 (7.5)	11 (6.1)	26 (6.8)	
気配りする人	12 (6.0)	7 (3.9)	19 (5.0)	
その他	8 (4.0)	2 (1.1)	10 (2.6)	

* $p < .05$, ** $p < .01$

男子大学生が捉えた『やさしい男性』に対する出現順位は、上記の分類に従うと「③思いやりのある人」「⑨援助する人」が共通に高く全体のそれぞれ15.5%を占める。「思いやり」という表現には、『やさしさ』をすべて包含した印象がある。「相手を思いやる」気持ちは普通に使用する頻度が高く、『やさしさ＝思いやり』という関係を示すものである。また「援助する」気持ちは「思いやり」の具体的な行動（例：困っている時に助けてあげる、協力する、手伝うなど）と解釈できるだろう。その次は「⑥道徳的な人」（14.0%）、「①気づかう人」（13.5%）が続き、このカテゴリーは他者への立場に立って考えるという意味を示している。

女子大学生が捉えた『やさしい男性』に対する出現順位は、これも上記の分類に従うと「②エスコートする人」が最も高く全体の25.0%を占める。「エスコートする人」とは、たとえば「家まで送る」「車道を歩かせない」「ドリンクを運んでくれる」「ドアを開けてくれる」「手を引っ張ってくれる」という人であり、これはおそらく男性（相手）が女性（自分）に対してとる行動という意味と解釈できる。その次は「①気づかう人」（24.5%）で、これは「相手のことを考えられる」「心づかいができる」「相手の気持ちを考えてくれる」「自分より相手のことを考えて気づかう」という人である。さらに「④相談にのる人」（11.1%）が続き、これは「話を落ち着いて聞いてくれる」「親身になって相談にのってくれる」「話をちゃんと聞いてくれる」という人である。いずれも、女性（自分）が男性から愛他的に関わられることを期待し、それが満足される行動を『男性のやさしさ』と理解しているようである。

男子および女子大学生380名全体をまとめると、「気づかう人」（18.7%）、「エスコートする人」（16.8%）、「思いやりのある人」（12.6%）、「援助する人」（10.8%）、「道徳的な人」（10.3%）などの順で男性の『やさしさ』を系統立てているが、「気づかう人」をはじめ、男子大学生と女子大学生とが各カテゴリーを同様の水準で捉えているか否かは不明である。

性差について検討した結果、表-3に見られるとおり5カテゴリーに有意差が認められた。「気づかう人」は1%未満の水準（ $CR=2.74$ ）で女子の方が強く求めている。気づかうのは「男性から女性へ向かうべきである」という構図が見える。「エスコートする人」は1%未満の水準（ $CR=4.03$ ）で、こちらも女子の方が強く求めている。同様に、「相談にのる人」も1%未満の水準（ $CR=2.65$ ）で女子に高い。他方、「援助する人」は1%未満（ $CR=3.10$ ）、「道徳的な人」は5%未満（ $CR=2.53$ ）で男子の方に強い。カテゴリーからも理解できるとおり、性差が認められた「男子<女子」のパターンは女子に受動的な要因を強調するものといえる。これに対して「男子>女子」のパターンは男子に能動的な要因を強調するものである。同様に『やさしい男性』を主張しても、男子と女子との間に普遍的な人格像は弱い。

3. 大学生が捉えた『やさしくない男性』の分析

次に、男子および女子大学生が捉えた『やさしくない男性』について、その記述内容を精査し

類似性の高い9種類のカテゴリーによる分類を試みた。表-4はその結果をまとめたものである。ここで、各カテゴリーごとに『やさしくない男性』に対する出現順位（出現頻度）の傾向を概観していくことにしよう。

男子大学生が捉えた『やさしくない男性』に対する出現順位は、上記の分類に従うと「①自己中心的な人」が最も高く全体の25.0%を占める。「自己中心的な人」とは、文字通り「自己中心的」という言葉で表現される人である。その次は「②攻撃的な人」(24.5%)で、これは「暴力（言葉を含む）を振るう人」「人の傷つくことを平気で言う人」「すぐ怒る人」などであり、「暴力／暴言／怒る」がキーワードといえよう。さらに「④気づかない人」(19.5%)、「③自分勝手な人」(11.5%)が続いている。「自己中心的な人」と「自分勝手な人」とは同じ行動特徴を示しているものと思われ、この両カテゴリーを合計すると「やさしくない男性」の36.5%を占めることになる。男子大学生は、同性の立場からもこのような男性を敬遠していることが容易に理解できる。

女子大学生が捉えた『やさしくない男性』に対する出現順位は、これも上記の分類に従うと、「①自己中心的な人」が最も高く全体の23.9%を占める。その次に「②攻撃的な人」(23.3%)、「③自分勝手な人」(18.9%)、「④気づかない人」(13.9%)が続く。「気づかない人」とは、たとえば「相手を思いやれない、人の痛みがわからない」ということである。また、これも男子の場合と同様に、「自己中心的な人」と「自分勝手な人」とは観点の相違はあるが基本的には同じ特徴を表現しているものと思われ、両カテゴリーを合計すると「やさしくない男性」の42.7%を閉めていることになる。この比率は男子の数値(36.5%)よりも高く、その意味は相手（すなわち女性である自分）を無視した行動をとる人である。「攻撃的な人」「気づかない人」を加えると、女子大学生から見た『やさしくない男性』とは、「自己中心的で自分勝手、暴力を振るっ

表-4 大学生が捉えた『やさしくない男性』の分類（頻度、%）

カテゴリー	男子	女子	全体	性差
自己中心的な人	50 (25.0)	43 (23.9)	93 (24.5)	
攻撃的な人	49 (24.5)	42 (23.3)	91 (24.0)	
気づかない人	39 (19.5)	25 (13.9)	64 (16.8)	
自分勝手な人	23 (11.5)	34 (18.9)	57 (15.0)	*
自己主張する人	11 (5.5)	10 (5.6)	21 (5.5)	
冷たい人	8 (4.0)	11 (6.1)	19 (5.0)	
交流しない人	8 (4.0)	4 (2.2)	12 (3.2)	
態度が変わる人	3 (1.5)	4 (2.2)	7 (1.8)	
その他	9 (4.5)	7 (3.9)	16 (4.2)	

* $p < .05$

たり怒ったりするうえ、相手を気づかわない高飛車な態度をとる人」とまとめられる。

男子および女子大学生380名全体をまとめると、「自己中心的な人」(24.5%)、「攻撃的な人」(24.0%)、「気づかわない人」(16.8%)、「自分勝手な人」(15.0%)などの順で『やさしくない男性』を系統立てている。

性差について検討した結果、表-4に見られるとおりの1カテゴリーに有意差が認められた。それは「③自分勝手な人」であり5%未満の水準($CR=2.02$)で女子の方に高い。女子大学生にとって「自分勝手」というカテゴリーは特に強いイメージがあるのだろう。特定の男性が自分の意見等を受け入れてくれず、勝手な行動をしてしまう結果に不満を持っているのかもしれない。その他のカテゴリーには性差は認められなかった。「自分勝手な人」以外のカテゴリーは、男女を問わず共通に好ましくない人格ということになるのだろう。

4. 大学生が捉えた「〇〇してくれる人」の分析

最後に、他者からの一方向的な供与を期待する記述(それを『やさしさ』と感じる傾向)について検討した。男子および女子大学生が捉えた『やさしい男性』への記述の中に「〇〇してくれる人」というものが存在する。例えば次のようなものである。

『やさしい男性』の具体例

- ・私の気持ちを考えてくれる人
- ・さり気なく助けてくれる人
- ・親身になって相談にのってくれる人
- ・ドアを開けてくれる人
- ・守ってくれる人 ……………など。

表-5は、出現頻度をまとめたものである。表からも理解できるように、男子と女子との間に出現率に差異が認められる。それは全体の分布($\chi^2_0=67.71$)だけでなく、記述の有無(〇〇してくれる：記述あり)において1%未満の水準($CR=8.22$)で女子に有意に多い結果である。

このような「〇〇してくれる人」という表現の背後に、何が潜んでいるのかを知ることは大変

表-5 「〇〇してくれる人」の出現(頻度, %)

大 学 生	記述あり	記述なし
男 子	22 (11.0)	178 (89.0)
女 子	89 (49.4)	91 (50.6)

興味深いところである。追跡調査や面接などをとおしてその心理的意図を確認しているわけではないので記述の正確な意味は不明であるが、男子の出現率と比較して女子の方が有意に多いという事実は明らかである。対象者が女子大学生であることに限らず、対男性（自分から見た特定の男性または一般の男性）を自分の立場から眺め、広く『やさしい人』を想起するよりも、自分を中心に自分の枠組みを大切に思っただけで回答した可能性がうかがえる。したがって、男性は同性の男性から「○○してもらおう」ことよりも、異性である女性に「○○してあげる」ことを選択するのではないだろうか。そして、女性は男性以上に自分にとって有利（またはプラス）になるか否かを考える傾向が強いと言ったら言い過ぎであろうか。また、『やさしい男性』とは自分の「好きなタイプの人」であるか、またはそうあってほしい人ではないのだろうか。

IV. 結 論

以上の諸結果から、男子および女子大学生を対象に『やさしい人』を規定する要因を自由記述の方法によって求めると、全般的に次のような結論を提出することができるであろう。

- (1) 男子大学生から見た『やさしい男性』とは、「思いやりのある人」「援助する人」「道徳的な人」「気づかう人」などの順に出現頻度が高い人である。一方、女子大学生から見た『やさしい男性』とは、「エスコートする人」「気づかう人」「相談にのる人」「思いやりのある人」などの順に出現頻度が高い人である。「気づかう人」(男子<女子)、「エスコートする人」(男子<女子)、「援助する人」(男子>女子)、「道徳的な人」(男子>女子)、「相談にのる人」(男子<女子)の5カテゴリーに性差が認められた。
- (2) 男子大学生から見た『やさしくない男性』とは、「自己中心的な人」「攻撃的な人」「気づかない人」「自分勝手な人」などの順に出現頻度が高い人である。一方、女子大学生から見た『やさしくない女性』とは、「自己中心的な人」「攻撃的な人」「自分勝手な人」「気づかない人」などの順に出現頻度が高い人である。「自分勝手な人」(男子<女子)の1カテゴリーに性差が認められた。
- (3) 『やさしい男性』を規定する要因の中に、「○○してくれる人」という記述が見られた。特に女子大学生の記述の中に多く、全体の約半数を占めており、男子大学生と比較して有意な性差が認められた。仮に、対男性を一般論ではなく周囲にいる身近で特定の男性に置き換え、その男性との付き合いを想起して回答したとすれば、女子大学生にとっての『やさしい男性』とは自分にとって「好きなタイプ」であり「自分にプラス」の行動を期待できる人ということになる。このあたりは解釈が何とも難しいが、自分を優先的に考える傾向が強い現代の若者を象徴的に反映していると思われる。『やさしさ』を男性と女性のどこ（性格、行動、考え方など）に置いているのかは複雑である。仮説的ではあるが、女子大学生がふだん

口にする『やさしい人』『やさしくない人』の判断基準は、自分から見た男性と女性のことを言っているのであって、一般的な『やさしさ』ではないのかもしれない。

今後は、設定カテゴリーの精緻化をはじめSD法による質問項目への評価、処理などをおして、普遍的な人格の『やさしさ』の構造に迫りたいと考えている。

【参考文献】

- (1) 高嶋正士：『偉人・天才の心理学』，1997，医学出版社。
- (2) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その1）特に，児童による偉大性要因の分析——」，1999，城西大学女子短期大学部紀要第16巻第1号，53-61。
- (3) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その2）特に，小学生と中学生による偉大性要因の比較——」，2000，城西大学女子短期大学部紀要第17巻第1号，21-29。
- (4) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その3）特に，中高年における偉大性要因の分析——」，2001，城西大学女子短期大学部紀要第18巻第1号，23-32。
- (5) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その4）特に，母親から見た高校生について——」，2002，城西大学女子短期大学部紀要第19巻第1号，8-17。
- (6) 藤田主一：「人格の偉大性に関する心理学的研究——（その5）特に，人格の「やさしさ」を規定する要因について——」，2003，城西大学女子短期大学部紀要第20巻第1号，9-18。
- (7) 詫摩武俊：「『やさしさ』について——その心理学的考察——」，1983，『青年心理』第40号，6-15，金子書房。
- (8) 伊藤忠弘：「『やさしさ』についての探索的研究」，2000，日本心理学会第64回大会発表論文集，203，京都大学。
- (9) 大平 健：『やさしさの精神病理』，1995，岩波新書。